

やはり俺のセカイは間違っている

reira

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行で大問題を起こし、孤立した八幡。

その後、父親の転勤を機に、闇を抱えたままに比企谷家は渋谷に引越しをする。
その先でまつ渋谷での新しい出会い。

そして、八幡に希望は――

他小説にも見られるプロセカ? 八幡&小町です。

衝動的に書き始めた駄文になります。ゆつたり更新して行きたいと思います

目 次

また比企谷八幡は出遅れる

比企谷八幡は入院している

宵崎奏は助けたい

天馬司は妹を心配する

比企谷八幡は退院する

32 23 15 7 1

また比企谷八幡は出遅れる

「あなたのやり方……嫌いだわ」

「んあ……もうこんな時間か」

また、いつもの夢を見る。気がつけばもう朝になっていた。

リビングに降りると、テーブルの上にお弁当が置かれており、近くのメモには小町はもう出ていった旨が書かれていた。

元は千葉の総武高校に通っていた俺は、修学旅行の後いじめが酷くなつた。心配した親が父親の転勤をきっかけに渋谷にお引越ししたのだ。

しかし、俺と小町の兄弟仲も修学旅行後の口論から冷えきつており口も聞いてくれない。そんな中でもお弁当を作ってくれるのは小町なりの優しさなのだろう。そんな事情もあって、俺は神山高校に。小町は宮益坂女子学園という場所に通う。

そして、今日が2年生の入学初日だ。

面倒臭がりながらも、時間の無い俺は慌ただしく学校へと向かつた。

時間の無い俺は、早歩きで学校へと向かつていた。

横断歩道へと差し掛かるときだつた。後ろから女の子たちのうるさい声が聞こえてくる。

「一ちゃん、ほなちゃん、志穂ちゃん、はやくはやく～！」

「ちよつと、咲希！」

「待つて！」

ふと見ると、こつちに突っ込んできているトラック。運転手はよく見ると寝ている。そこに先頭を走っていた金髪ツインテールの女の子が飛び出した。別に女の子は悪くない。横断歩道の信号は青だ。まずい……！

「わっ!?」

「ちよつ」

「えつ」

3 また比企谷八幡は出遅れる

気がつけば、俺は全速力で駆け出して女の子を突き飛ばして――

俺はトラックに轢かれた

「……お兄ちゃん、また？」

「すまんな、小町」

「はあ……これだから『みいちゃんは全く

はい、また入院。

何故かデジヤブを感じるよね……

小町にも親にも怒られた。けれども、口を聞いてくれなかつた小町がいつもお見舞いに来てくれて、なんだかんだ話をしてくれようになつた。母親も、心配だつたのか、怒つたあと抱きしめて泣いていた。柄にもなく、愛されてはいたのかと俺は驚いたものだ。

ちなみにトラックがフェニックスワンドーランド？　とかいうとこの工事車両で、相

次ぐ工事で運転手さんが疲れてしまつていたらしい。ブラックだな。そういうふた事情もあり、フェニックスワンドーランドの責任者の鳳つてどこから慰謝料を貰つたらしい。リハビリや俺の必要なものも買つてもらえるそうだ。

「足だけで良かつたけど……お兄ちゃん、死んでたかもしれないんだからね！」

「ああ、わかつてる」

「ほんとかなあ……？」それに、全治1ヶ月だからお兄ちゃん……」

「また出遅れスタートだな。問題ない、いつも通りだ」

「そうだね、またお兄ちゃんボツチルート確定かー。小町的にポイント低すぎるよ」

「大丈夫、普通にスタートでもボツチルートからはそれないぞ」

「これだからごみいちゃんは……」

こんな漫才のような会話も、いつぶりだろうか。気がつけば、俺は目から涙がこぼれていた。

「ちよつと、お兄ちゃん？ 泣かないでよ」

「すまん、小町とこれだけ久々に話せてつい、な。お？ これ八幡的にポイント高い？」

「最後のがなればねー」

小町と軽くやり取りしながら、隣のベッドを見やる。

俺の隣のベッドでは、男が無表情で寝ている。時々看護師さんが読んでたのを聞く

に、宵崎さんという人らしい。全く起きる気配はない。ストレスで倒れたらしい。が、どんなストレスがあればこんなになるんだか。やっぱり世界つてブラック労働だよな。俺は心の中で専業主婦になることを誓うのだった。

小町が帰った後。俺は、スマホのイヤホンから音楽を聞いていた。

修学旅行の後、俺は傷心から全てを投げ出しかけた。それを止めたのが、意外なことに音楽だった。当時まだ関係を保っていた戸塚から紹介された『25時、ナイトコードで』の曲。この曲の、なんだか不思議と包まれるような優しさに、俺は救われた。それからも不思議と俺はこのサークルの曲を聞いている。

そんなことをしていると、トントンとノックがなつてドアが開く。白髪で碧生目をした、ジャージの女。彼女は荷物を手に俺の隣のベッドへ向かつた、

「……お父さん」

どうやら、寝つきりの男性の娘さんらしい。

俺はいつものステルスを駆使して影を消す。何となく、この2人の関係は俺が知るものは無い気がした。

「……のだが。一通り一方的に話し終えたかと思つたらこっちに来た。なんでや。

「……その曲、ニーゴの」

「ん？ ああ、そうだ。ハマつててな。あんたも知つてるのか」

「……うん」

「ああ、曲か。イヤホンからちよつと音漏れてたのか……？ 隣の人に悪いし、欲しいものは鳳つてどこから金が出ると聞く。せつかくだ、もつといいイヤホンでも頼もうかな。」

「……そう。良かつた」

「わり、聞こえてたなら俺も気をつけるわ」

「うん……」

「なんだか嬉しそうにして帰つて行つた。

「……喜ぶ要素なんてあつたか？ まあ、いいか。」

「こうして、入院生活が始まつた。」

比企谷八幡は入院している

入院生活数日。

あの青い目をした銀髪の子がよく隣の人の為にやつてくることが分かつた。盗みぎくつもりはなかつたが、奏という名前らしい。

そいつは決まって俺の方にも来て、軽く話して帰っていくようになつた。なぜ俺にかまうのかは……よく分からん。

寝つきりの彼に会いに来るのは奏のみだ。母親は——いや、考えるのはよそう。

ちなみに、俺のところに来たのは小町と親だけだ。似てるな、来る人少ないってどこが。あ、たまに黒服が来て欲しいもの聞いてくることがある。前回のこともあつて、とりあえずイヤホン貰うことにした。

お、今日もドアのノックが。もう奏は帰つたし、小町かな。

「今日もありがとうな、こま……は？」

入ってきたのは黒髪ロングと金髪ツインテ、銀髪ショートにポニテの4人の女の子だつた。誰だこいつら。こんな美少女に囲まれるような主人公は俺してないんだが

「うわ、ゾンビ……!」

「志歩ちゃん……お礼に来たんだから隠れちゃダメだし、失礼だよー」

「……すみません」

「あ、あはは……」

おい、銀髪ショート。それ普通に傷つくだろうが。

そして、朧気ながらぼんやりと思い出した。この金髪ツインテ、車に轢かれかけた金髪ツインテじゃないか。

と、思い返していたら金髪ツインテが詰め寄ってきた。これはあれだ、陽キヤの気配がする。

「どーにーかーくーー！ 助けてくれてありがとう、お兄さん！」

「……比企谷八幡」

「ほえ？」

「名前。比企谷八幡だ。別に好きに呼んでくれていいが……俺には妹がいるからな。その、お兄さんっていうのはなんか違うだろ」

「分かった、ひきぎや……八幡くん！」

「[[[[[……]]]]」

「私は天馬咲希、よろしくね！」

「おい、今噛んだろ。呼びづらいからって名前呼びしやがったな、こいつ。しかもス

ルー。まあ、べつに目くじら立てる程じゃないけど。

「……いきなり名前呼びはさすがにない。比企谷で」

「私は呼びやすいし八幡さんでいいかな」

「ん……比企谷さん、かな」

なんか、みんなでなんて呼ぶか考へてるんだが。いや、そんなお前らとつるむ気はこちとら全くないぞ?

「私、星乃一歌つていいます。八幡さん。その、怪我は大丈夫なんですか?」

「ん。ま、足だけだから命に別状はない。それに、全治1ヶ月だから前より短い方だからそんなに気にしなくていい」

「前?」

「前にも、道路に飛び出した犬を庇つて轢かれたことがあるんだわ」「はあ……」

そんな他愛ない話をしながら、ちらりと陰に隠れた銀髪ショートを見る。あ、すぐにポニテの陰に隠れた。

そうして、苦笑いをしながらポニテ少女がおずおずと前にでる。

「志歩ちゃんがここまで怖がるの珍しいね。私、望月穂波つていいます。よろしくお願ひしますね、比企谷さん」

「お、おう」

「そうだ、果物みんなで買つたんです。置いておきますね」

「そうか、ありがとな」

なるほど、つまり助けられたからお礼に直接会いに来てくれたわけだ。正直、感心した。前の時は助けたやつ直接会いにこないままあとからお礼で持つてきてくれたクッキーを小町に平らげられたからな……
数日経つてからきたのは、事故を目の前で見たショツクが少なからずあつたのだろう。

と、思案を膨らませていると望月がさらに袋を差し出してくる。

「そうそう、小町ちゃんにお兄さんの好物をきいたらマツ缶が好きとお聞きしまして。買つてきたので、置いておきますね」

「!? ほんとか、サンキュ!!!」

なんだ、この至れり尽くせりは。小町が天使なら望月は女神まであるぞ。
しかも、マツ缶。病院食だった俺にはありがたすぎる。

「……比企谷。マツ缶の時だけ、喜びすぎでしょ」

「いいだろ別に。人生苦いんだから、コーヒーくらい甘いのがちょうどいいんだよ」「何言つてんの……」

「……カツコいいー!!」

「そ、そうか?」

なんか、銀髪ショートの子——志歩ちゃんつていつてたか。そいつにジト目されたからいつもの決まり文句言つたぜ。

そしたら、金髪ツインテうさぎ……はつ、そのツインテ耳だつたのか。
うさぎか。金髪ツインテうさぎ……はつ、そのツインテ耳だつたのか。

とまあ、ふざけるのはさておき。だいたい共感も得られずに今の穂波みたいに苦笑い
されるか、今の星乃みみたいにひかれるかの2択なのだが。この反応は珍しいな。

「うわ、にやけてる……キモ」

「ちょ、志歩ちゃん!」

「大丈夫、言われ慣れてるから」

「だからつて……」

銀髪ショートのきつい言動の子——志歩ちゃんと言うらしい——から罵倒が飛ぶ。

が、何故だろう。不思議と胸が暖かくなる。あれ?
俺つてMだつけ?

「……八幡、さん?」

「泣いてる……?」

「え、あ、いや。大丈夫だ」

なんか、無駄に心配させちまつたな……

「志歩……」

「……（ジ）めん」

「や、気にすんな。生まれつきこんな目してて俺が悪い。直せるもんでもねえけどな」

俺の自虐ネタも心配そうに見つめられる。ああ、そうか。こいつら優しいやつなんだな……そうして、人を輪に引き込む。別に入りたくもないのにな。俺の苦手な人種だ。そう自分で言いながらも、どこかこいつらを信じてしまう自分もいた。はは、もう諦めたはずなんだがな。

——どうして、諦めたんだっけか

「ねえ、八幡さん。リンゴ食べる？　皮むきは得意なんだ」

「いや、大丈夫だ……って、もう綺麗に剥けてるし」

はえーよ。しかもうさぎだし。芸も細かい。

「得意なんだ。ほら、どうぞ」

「ん……」

ふむ、さすがにここまでされて断る訳にもいかないか。

ひとくち食べる。なぜか、普段家族で食べるリンゴとはまた違う味がする。

「……美味しいな」

13 比企谷八幡は入院している

「そつか、よかつた」

……このやり取りの間、望月は隣の宵崎を見て心配そうにしていた。ずっと寝たきりだもんな。

その後もしばらく、この4人組と話を続けた。久々にかなり人と話した気がする。
「じゃあな。もう遅いし、気をつけるよ」

「八幡くん、またねー！」

「比企谷さん、また。リンゴ持つてくるね」

「ええ、また来ますね」

「……じゃ」

そうして4人が離れて、静かになつた病室。

俺は、頭を抱えていた。困つてるわけでは無い。単純に、頭が痛い。頭痛だから当然だが。

「……はあ」

なぜ寂しいと思つたのだろう。なぜ、恐怖から身がすくんだのだろう。昔から、女性と話す時はつい身構えてしまう。理由は不明。……いや、俺にはこれが普通だ。そう、俺はエリートばつちなのだから。

そう言い聞かせてケリをつけた俺はいつも通り、俺がニーゴの曲を再生しようとスマホを手に取つた時。スマホの画面が突然光り出す。

『比企谷君、今すぐセカイに来るよう』

「…………」

うん、夢だな。これは。スマホからバーチャルシンガーのMEIKOが出てくるなんて夢に決まってる。

俺は反射的にスマホの電源を消して、その後部屋を暗くして寝た。

宵崎奏は助けたい

それから1週間程。その間はいつも通りだつた。

小町が来たり、宵崎が来たり、4人組が来たり。

……たまに、誰か知らんがうるさいのが来た時は、宵崎父の為に鍵をかけて締め出した。隣のベッドには寝たきりの奴がいるんだ、体に響いたら困る。

変わつたことと言えばそうだ。小町は何やら頑張つてゐるらしい。部活かサークルかなんかに入つたらしく、ここに来るのも練習終わりらしい。ちなみに宵崎は朝とか昼とかに。4人組（あとうるさいの）は放課後辺りに来るためこれらの来室イベントが被ることははない。

あと4人組の女神こと、望月から人形展のペアチケットを2枚貰つた。「もうすぐ退院だし、家族と一緒に見に行つたらどうか」と言われたのだ。が、小町がなにやら別のことでの頑張つてゐるため水をさしたくないなと思つてゐる。だからといつて誘う友達もいない。つまりは持て余してゐるわけだ。

とまあそんな日々を過ごす俺。今日も病室の扉がノックされて宵崎が入つてくる。寝つきりの宵崎父と一通り話して荷物を渡したあと、ニーゴの曲を聞いて黙つてる俺の

所に宵崎がやってくる。

「……宵崎か。よう」

「……ちょうど曲終わつたところ」

「分かるんだな」

「私もその曲好きだから。八幡」

「そうか」

「……」

「……」

ちなみに、なんだかんだ良くな病室に来てしばらく一緒に話している（？）間に宵崎とはコミュ障仲間になつた。名前教えたら呼び捨ての名前呼びにしてきた。呼びやすいらしい。

なんつーか、ずっと黙つて居るが表情で何考へてるか分かりやすい。お互黙つても不思議と宵崎に關しては居心地いいんだよな。

「……あの」

「ん？ どうした宵崎」

「……奏」

「ん？」

「私、宵崎奏……名前で呼んで欲しい。ほら、隣にお父さんもいるから」

「あー……」

「ダメ?」

確かに、宵崎という苗字が寝たきりとはいえ2人いるのはややこしいか。数少ないボツチ同士だしな。

「そうだな。……奏」

「……！ うん、八幡」

なんだか、宵崎——いや、奏は嬉しそうに帰つて行つた。

……いや、初めて名前呼びとかしたからあれなんだが。これ、あれだな。恥つず。

「八幡」

「ん?」

「……もうしばらくしたら、退院だよね」

「まあな」

実を言うと、あと数日で退院になる。リハビリもしていく、足ももう問題なく動く。

つまりもうすぐ学校に通わないといけない。……やだなあ、面倒くさい。

「連絡先、聞いてもいい? また、話したいな」

「構わん。ほれ」

「……？」

「俺のスマホを宵崎に渡すと、宵崎は首を傾げた。

「ああ、俺やり方知らないんだ。見られて困るもんもねえし、勝手に追加しておいてくれ」

「ああ、うん。わかつた……つ、これは……」

「奏、どうした？」

宵崎がスマホを操作していると、ふと宵崎がなにかに気がついたように止まる。俺もきになつて覗き込むと、そこには「Untitled」と言う題名の曲があつた。念の為に言えば、俺は曲をひとつも端末に入れてない。ニーゴの曲も某あなたのつべとかいう動画アプリからである。

「……知らない曲だな。どんな曲なんだ？」

「あ、待つて八幡。それは——」

「何だ、これは——」

奏の静止も間に合わず。俺がその曲を再生するとスマホが光りだして、その光に俺と宵崎は巻き込まれた。

「……」

見覚えのない場所だ。空き教室だろうか。椅子もあつて座れそうだ。周囲を見渡して奏を探すが、見つからない。

「……」

歩き回つて治りかけの足を壊しても困る。とりあえず椅子に腰かけておけば問題はないはずだ。たまたま手元にある本でも読んで待つてようか。

そうして椅子に座つてしまふと、ドアがノックされる。そうして入ってきたのは、

「きたな、比企谷。早速依頼が来てる」

「八幡……」

バーチャルシンガーであるはずのMEIKOと、一緒に連れられてきた奏だった。いや待て、依頼？ なんの話だよ

「俺はまだ受けてないぞ」

「いや、私が受けた。比企谷、お前がやれ」

「はあ……」

横暴な。でも、まあ依頼人が知つてゐるやつなのがまた。俺はため息をつきながらMEIKOを無視して奏に向き直る。

「奏、お前は何か困つてんのか？」

「それは……」

「困つてんなら話位は聞いてやる。なんだ、知り合いだしな」

「……分かつた。困つてる。聞いて欲しい」

「ん」

無視したMEIKOも、空気を読んだのか黙つて奏をみつめている。

奏は、話し始めた。

「私には、救いたい人がいるの。その人を助けたい時、どうすればいい？」

「……とりあえずまずは、話をして、聞いてみろ。ある程度悩みぐらいは分かるかもしけねえ」

「もし、その人がどうして悩んでるのかも分からなかつたら？」

「あー……」

助けたい、が、本人すら悩みが分からずどうすればいいのかわからんつてことか。

ずっと1人な俺にそんな経験は無いから、はつきりいつて知らん。が……

「なら尚更こつちから話せ。話せば相手は反応する。その様子から、相手のことが深く

知れるだろ」

「…………」

「もし、探りを入れて拒絶されるようなら切り上げろ。受け入れてくれたなら、しつかり相手のことをよく見ろ。人つてのは案外、細かい動作や言葉に現れるもんだしな」「相手のことを深く知る……そつか。ありがとう。参考になつた」

「…………あ、そうだ。奏、これ渡しとく」

奏に、望月から受けとつたものの、持て余していたチケットを差し出す。

「人形展がこの病院のすぐ近くでやつててな。せつかくだしそいつと行つてみたらどうだ? 話すきつかけにもなるしな」

「ん……分かつた。ありがとう、八幡」

嬉しそうに受け取る奏。何がそんなに嬉しいのか、俺にはよく分からんが。まあ、解決するかどうかは後は本人次第だな。

「聞いてくれてありがとう。それじゃ、また」

「あ、おいどうやつて……」

「気がつけば、奏はいなくなつてた。俺、帰り方知らんのだが? と困惑していると、後ろから声がかけられる。

「依頼解決おめでとう、比企谷」

「いや、これで解決するかは本人次第だ」

MEIKOだ。ごめん、ずっと黙つてたから正直忘れてた。俺といい勝負してるぜ。と、そんなことを考えているさなかMEIKOは話続ける。

「それでも、きつかけを掴むくらいにはなったと思うぞ。あ、そうそう。ここから帰るには、スマホからUntitledをもう一度再生すれば出られるからな。今日の活動は終わりだ。もう帰れ」

「あいよ」

俺は促されるままにUntitledを止めたのだつた

天馬司は妹を心配する

さて、変な世界に飛ばされて翌日のこと。

俺はセカイに戻り、MEIKOから大凡の説明を受けていた。わけがわからなさ過ぎる上にほつとくのはリスクがある。また、人前で出てこられたらこまる。

まあ、端的に説明していくと、想いからセカイが生まれる。そして、本当の想いに気がついた時、歌が産まれるとか。なるほどわからん。

で、MEIKOは手伝ってくれると言った。本人曰く「依頼を解決していけばきっと想いは見つかる」らしい。

……なんだ、この訳分からんファンタジー世界は。頭痛い。

ちなみに、この教室1部屋が俺のセカイである。外には出られない。なんでだよ。

……頭が痛くなつたので、元の世界に戻ることを告げると私もやることがあると帰つてきた。俺は教えられたとおりにこの世界から離れた。

事情をパンクしそうな頭で整理をして終わつた頃には夕方になつていた。すると、不意にドアをノックして人が入つてくる。

「ん、どうぞ」

「ハツハツハー、我こそは」

「…………」バタン

すぐさま扉を閉めて鍵をかける。でた、うるさいのだ。普段ならそこで終わりなのだが……

「…………あのー、ごめんね八幡君。ドア、開けてくれないかな?」

「ん? その声……天馬か?」

「うん。お見舞いに来たんだ。その、お兄ちゃんもつれて」

「んーと、つまり? 声クソでかいあのうるさいのがこの金髪ツインテの兄か。で、お見舞いないしお礼言いに来たら締め出されたと。全く、要件はちゃんとと言え。

「…………事情は理解した。が、いいか? よく聞け。横に寝つきりの病人がいるんだ。過度のストレスで倒れたらしい。さらに負荷をかけて何かあつてはならない。だから、いいな? 絶対静かにしろ」

「……！ そうだつたか、すまない。気をつける」

「私も気をつけるよ！」

……ため息混じりにドアを開けた。兄弟が中に入ってくる。ふむ、こう見るとなつかににてるな。うるさいところとか、髪とか。

「さて、俺は天馬司。咲希の兄だ。要件は伝えた通りだ。妹を助けてくれて本当にありがとうございました。感謝する」

「ああ、まさかあんな大声で騒ぎ始めてるのに要件が感謝を伝えに来たとは思わなかつたわ」

「ははは、お兄ちゃんいつも通りだなー」

それでいいのか、妹よ。俺がやつたら絶対引かれる自信があるわ。いや、引くね。間違いない。ソースは小町。

「とまあ、そういうわけでありきたりだがフェニックスワンドーランドのチョコを持つてきたぞ。職場でな。機会があれば、見に来てくれ」

「わあー、ぱちぱちー」

「ありきたり……？ いや、助かるからいいが。さんきゅ」

急にポーズを決める天馬兄。静かーに拍手する天馬妹。困惑する俺。何だこの状況は。

「ふう、これで何とか最低限の仕事は無事済んだな……」

「それじゃ、練習あるから私はここで失礼するね。ちゃんと静かにね、お兄ちゃん」

「ああ、この世界一のスターにお任せあれ」

クスっと笑つて天馬妹は出ていった。天馬兄が残ると、急に空気が変わつた気がした。

「…………なあ、比企谷。ちよつとだけ相談していいか？」

「ん？ ああ」

「最近、咲希がここに来る時どうだ？ なにかおかしなことはなかつたか？」

「最近……そعدな」

なんというか、少し最近の彼女の行動は何となく違和感らしきものが確かにあつた。
趣味の人間観察だが。

「忙しいらしくてここをすぐ出ていくから分からないが……何となく、少し違和感を感じるな。なんつーの？ こう、がむしやらに頑張つてるつつーか」

……伝達力不足だろうか。ただ、漠然とした違和感なため俺もわからん。

「がむしやらに、か……うーむ、どうしたものか」

「どうかしたのか？」

「咲希は体が弱い。それなのに急にバイトに部活にバンドまでやつてるから、体が心配

でな……」

「なるほどな」

「心配、な……」

「それは、お前もだからな」

「……なんだと？」

「自分では気がついてないかもだが。結構お前も俺の目には無理して見えるってことだ。これは俺の予想だが……働き始めたのも最近なんじやないのか？」

「そうだが……」

「だから、妹もお前のことを心配してるように俺には見えたぞ」

「…………」

そう。簡単に今の天馬兄の状況を説明すると、カツコつける時も少しふらついていて、目の下にクマが見えている。はよ寝ろ。休め。

「心配するのは分かる。俺も、あいつの様子がおかしいのも気づいてるからな。だが、人の心配の前にお前は自分の心配をしろ。心配して相手を心配させてどうする」

「……その通りだな」

「ん。まあ、それでも気になるならほかのやつに任せたらどうだ？ 知らんけど」

「ああ、分かった。俺は帰つて休むとしよう。助言、感謝する」

そうして、天馬兄も帰つていった。静かになつて1人ため息をつく。すると突然スマホからMEIKOが現れた。

「……夢じやなかつたのか」

『何馬鹿なこと言つてるんだ。もうとつくに奉仕の時間だぞ』

「わり、こつちでも依頼受けててな」

『ふーん、どんな?』

聞かれたので、説明することにした。ここで気がついたが、MEIKOはかなりの聞き上手だ。細かいところは聞いてくるし、かといつて楽しそうに聞いていてこちらもつい話したくなる。

「——とまあ、そんな感じでな」

『……本当に、解決したようだな、比企谷』

「嘘なんて言いませんよ」

『誤魔化そうとするけどな』

「うつ……」

ぐう、正論。

『……本来無視したつていいのに。よく頑張つたな。今日はもう休んでいいぞ。私が許

す

「おう」

なんか許された。そんなわけでやることも無くなつた俺はこの日、はやめにゆっくり寝た。

《天馬家》

「ただいまー！……あれ、お兄ちゃん？」

「おお、咲希！　おかえり！」

急に入つたバイトが遅くなつて家に帰ると、お兄ちゃんはもう既にお風呂に入つていた。ココ最近、ずっと練習をしていたお兄ちゃんにしては珍しい。

「ふつふつふつ、実は……休んでいるかと問われてな。そこで、今日は休むことにしたのだ！」

「お、おー？　でもいいの？　コンテストで優勝するんだって、張り切つてたよね？」

そう、お兄ちゃんはなんとあのフェニックス・ワンダーランドのキャストでショーを

やっているのだ！ そして、人を笑顔にするショーやをするからと、ここのこところすつごく張りきつて頑張っている。週末に公演があるからと、昨日も夜遅くまで練習をしていなはずだ。それなのに、急に休むなんて……

「ああ、ショーやを見てくれる人に笑顔になつて欲しいからな。疲れた顔では、笑顔になどできん！ なぜなら、見ている人を心配させてしまうからな！」

「見ている人を、心配……」

『無理はしないでね』

志歩ちゃんがしきりに言つていた。もしかしたら、私もみんなを心配させちゃつたかもしれない。

「そう……だね」

「だから、な。咲希。焦る気持ちも分からんでもないが、張り切りすぎて無理はするな？」

「……お兄ちゃん」

そういうつて、お兄ちゃんは部屋に戻つていつた。……お兄ちゃんにもそう見えるのかな？

「私も、休もうかな……」

私は、体が辛いことを話して練習を休んだ。志歩ちゃんに怒られる！ つて思つたけ

ど……意外とすんなり受け入れられた。お見舞いにまでみんな来ててくれて、嬉しかつた。

早めに休んだのが上手くいったのか、金曜日にはもう体調もバツチリ回復。バンドの練習も再開して――

そして、週末。みんなで星を見に行く予定が……大雨。

それでも、みんなで星を見たい。みんなでおなじ時間を過ごしたいって話したらセカイに集まつて星を見ようって話になつて。

そして、ミクちゃんやルカさんを含めたみんなで。セカイの屋上に集まつて星空を見上げていた。

比企谷八幡は退院する

相変わらず小町は何やら忙しそうで、最近はあまり見舞いにも来なくなつた。奏は毎日決まつた曜日に来る。そして、ちょっとと話をして帰つていく。奏はかなり聞き上手で、話していく楽しきりだ。まあ、二人とも話すのが苦手だから黙り込む時があるが、沈黙も存外悪くないようと思える。

あの4人組はバンドをしているみたいで、練習帰りに寄つてくる。そのためか時間ギリギリにくる。かなり気遣つてくれているみたいだが、1人は俺の事を怖がつてゐるようだ。わかる。俺もいきなり女の子が4人も来たら怖いもの。

あと、黒服と柄の悪そうな奴が複数人時々来る。取り調べかよ。事故を起こしたトラックの大元、鳳グループのかなり上役だそうだ。めっちゃいいイヤホン買ってもらつた上にかつこいいヘッドホンをおまけにつけてきた。おかげで、周囲を気にせずニーゴの曲を楽しめる。

とまあ、リハビリしながら見舞いが時々きて。そんな日々が過ぎていき、そろそろ退院の時期が迫つてきていた。

「お兄ちゃん」

「小町、久しぶり」

退院当日。忙しいらしく、全然来ていなかつた小町が最後だからと来てくれた。

「なんか忙しいみたいなのに、すまんな」

「いいつていいつて。ごみいちやんが今更なこと言わないの」

「ごみ……」

普通に罵られた。まあ、過去にも事故つて入院してたらしいから扱いになれているの
かもしれないが。

「もう一人で歩ける?」

「おう、心配ねえよ」

ちなみに松葉杖も使つていたものの、鳳側から完治するまで面倒を見ると言つてくれ
たので手術も行つてゐる。なので歩いても痛みがない程完璧に治つてゐた。問題は歩
き慣れてないがためにリハビリがクソほどしんどかつたくらいのものだ。運動しよ。

「はいはい、黙つて考え方とかしてないで。帰るよ。お兄ちゃん」

「いや、解説大事だろ」

「読者はお兄ちゃんの入院中の描写とか求めてないから。ほら、さつさと帰る帰る地の文を読むな。小町よ。」

「いや、地の文どうこうじやなくて全部声てるからね？」

「アッハイ、さーせん」

そのまま、俺たちは無言で帰路に

「あ、ご飯の準備しなきや。何食べたい？」

「ラーメンで」

「うわ即答だね。じゃあ、買い物行かないと
ラーメンの買い出しをして帰った。」

《比企谷家》

久々の我が家。といつても、ほぼ引越ししたばかりだから新居といった感覺だ。

部屋に帰った俺は早速ソファに寝つ転がり惰眠を「ほら、ごみいちゃんご飯食べるよー」くそ、いいとこだつたのに。

「帰つてそうそう寝ようとするとか、さすがごみいちゃん」

「さすがごみいちゃんつてなんだよ……ナチュラルにごみ扱いするな」

「粗大ゴミの日いつだつたかなー、早くひきとつてもらわなきや」

「おいこら」

流石にちよつと頭にきたのでアイアンクロー（もちろん妹に手は出さない威力極低）からの髪の毛わしやわしや攻撃をすると、小町も「きやー!」とカラカラ笑っていた。一通り終えて落ち着いた頃に、夕食もといラーメンの準備をする。ちなみに濃いめのラーメンが食べたい（病院食は薄味）と頼んだら豚骨ラーメンになつた。

ふと気がつくと、足元に猫が来てにゃーんと鳴いていた。

「ん、カマクラも元気だつたか?」

「まあ、ちゃんと世話はしてたから。忙しくて相手まで出来なかつたけど……今日くらいいはいいか。カマクラー」

カマクラはにゃーんとないて小町の方へ。そのまま、餌を出しにとキッキンに向かつた。それを眺めながら、俺はソファで横になつてニーゴの新曲を再生する。ちょうど新曲が今日発表されたのだが、今の今まで聞けなかつた。

「ん、これは……」

イヤホンから流れる、鋭い刃のような恐怖。俺は衝撃を受けていた。

今まで、ニーゴの曲はまるで寒空の街頭のような、ぼんやりと温かい曲だった。その、どこか温かい曲が、何となく自分の失つたものを映し出しているような気がしていた。それが、今回は一変。周囲を切り裂いて拒み、悲しみを叫ぶ自身にはどうしようもない恐怖を叫んでいるかのような曲だった。……いや、なんだろう。不思議と鮮明と浮かぶ気がする。そう、俺もこういった恐怖を感じたことがあつて……お兄ちゃん俺は、それから――

「お兄ちゃん!!!」

「おわっ!? な、なんだ!?」

思索に耽つていると、隣から小町の大きな声と肩パンで現実世界に引き戻された。地味に痛てえ。

「ご飯できたよ! さ、食べよ!」

「お、おう」

なんだか、小町がこちらの顔色を伺つているような気がする。心配かけちまつたな、多分……。

俺は頭をかきつつ小町の後を追うように、ラーメンが2つ置かれたダイニングテーブ

ルに着く。

「それじゃ、いただきます！」

「いただきます」

そうして、二人で食事を始める。小町も結構しつかりラーメンを食べていた。

「そういや、お前は学校どうだ。もう1ヶ月過ぎたし、ずっと忙しそうだつたが」「あ、えーとね。驚かいで聞いてくれる？」

「ん？ おう。なんだ？」

「小町、アイドルになるの！」

「うん、そうか」

「そうだよ！」

一瞬、ザ・ワー○ドが起こつたかのような静かな寂寥が訪れる。

「……うん、は？ え？ アイドル？ 小町が？」

「うん！」

……何言つてゐのかよく分からん。が、まあうん。なら忙しそうだつたのも納得が

いつた。

「……ま、色々大変だろうけど頑張れよ。俺もなんかあつたら手伝うわ」「お兄ちゃんが来たら色々問題だけどねー。女学園だし」

「そういや小町はそうだつたな……ま、頑張れ」

「うん！ 小町、頑張る！」

なんだか、嬉しそうに話してゐる小町の影に時々最強の矛と最強の盾を抱えた商人のような暗いものが見える気がする。矛盾じやん。

どうにかしてやりたいものだが……

お兄ちゃんが帰つてきた。

何とか取り止めのない話をしながら帰宅して、カマクラに餌をあげて部屋に戻る。ここまでは良かつた。

ラーメンの準備も終えてリビングに戻ると、ソファの上でなんだか恐怖に震えているお兄ちゃんがいたのだ。何故かは分からぬけど……凄く苦しそうに見えて。私はお兄ちゃんにパンチまでして呼んだ。イヤホンをしていたみたいだけど……お化け屋敷の曲でも聞いていたのだろうか。とにかく、私はそんなお兄ちゃんを見ていられなかつた。痛そうにしていたけど、ごめんね？

私も、早くみのりちゃんみたいに希望を届けられるようになりたいな。誰よりも、お兄ちゃんに。

なんだか私がアイドルすることに驚いてた。まあ、それはそうか。急だもん。
そういうつた私をみて、お兄ちゃんは驚きながらも

「……ま、色々あるだろうけど頑張れよ。俺もなんかあつたら手伝うわ」
背を押してくれる。それが、たまらなく嬉しかった！

「うん！ 小町、頑張る！」

——お兄ちゃんのためにも。

今は言えない言葉を、そつと胸にしまつた。